

4 市川五郎兵衛による五郎兵衛新田の開発



齋藤 洋一
SAITOU Youichi

小諸市古文書調査室
室長

「五郎兵衛用水路」はいくつもの山をトンネルで掘り抜いて造られた。金山開発に携わっていた者達が掘ったこの用水路は、鉱山技術が土木技術に転用されたことを示唆している。難工事を成功に導いた市川五郎兵衛や工事を担った職人たちの存在を知る。

「五郎兵衛新田村」

いわゆる「昭和の大合併」によって浅科村となる昭和30（1955）年まで、長野県北佐久郡に「五郎兵衛新田村」という、個人の名前をつけた村があった。江戸時代初期に市川五郎兵衛という人物が中心となり、全長約20kmの用水路（五郎兵衛用水路）を開削したことで、この村ができたからである。村民は五郎兵衛に感謝し、村名を五郎兵衛新田村とした。以来、昭和の大合併までこの村名が維持されてきたのだ。なお、浅科村はその後「平成の大合併」によって平成17（2005）年に佐久市となっている。



写真1 南牧村の段々畑

五郎兵衛が生まれた市川家

それでは、市川五郎兵衛とはどのような人物だったか。五郎兵衛は、戦国の動乱まっただ中の元亀3（1572）年11月15日に、上野国甘楽郡羽沢村（現群馬県南牧村）に生まれた。従来元亀2（1571）年生まれとされてきたが、それは誤りである。生家は、羽沢村を含む南牧谷を拠点とする在地小領主の家で、五郎兵衛が生まれたところは甲斐国の武田信玄とつながっていた。

ところが、それから10年後の天正10（1582）年に武田家は滅びてしまう。とはいえ、徳川家康から「旗本」になるようにとの誘いもあり、それで市川家の武士としての

途が断たれてしまったわけではなかったが、市川家ではその誘いを断ったという。だが一方で家康から、文禄2（1593）年12月16日付で「分国中、金山・川金・芝間ともに、これを掘るべきこと」を第一条とする三カ条からなる朱印状を、大久保十兵衛長安を通じて与えられた。このうち「芝間」は「雑草の生い茂った荒地」というような意味であるから、市川家ではこのころ、金山開発・新田開発に従事しようとしていたと考えられる。

主眼は金山開発

だがその主眼はおそらく金山開発にあったと思われる。というのは、この朱印状とほぼ同文の印判状が同年11月9日付で、甲斐国黒川金山と駿河国安倍

金山の「金山衆」へ与えられているからである。市川家も金山開発を志向していたことから、この朱印状が与えられたと考えられる。元は武田家につかえ、武田家滅亡後は家康につかえて、石見・佐渡・伊豆などの鉱山開発にあたった大久保長安を通じて朱印状が与えられていることから、このことが裏づけられるように思われる。

隣の砥沢村（現南牧村）には、甲斐の武田家によって金が採掘されたという言い伝えの残る旧坑があり、近年の地質調査によって、金の採掘を目的に開削された坑道と判定された。この坑道を掘って金を採掘しようとしたのが、市川家ではなかったかと推測される。

しかし、採算がとれるだけの金は産出しなかった。そこで市川家は金山開発をあきらめ、同じ砥沢村にあった砥石山の経営にあたることになったのではないだろうか。この砥石は当時、江戸をはじめ関東各地や信州などへ販売され、相当の収益をあげた。

そして、その収益を基に五郎兵衛は、佐久における新田開発に乗り出したと考えられる。なお五郎兵衛は、これまで見てきた金山開発・砥石山の経営を、同族である砥沢村の市川（右近介）家とともに進めていた。したがって、この後の佐久における新田開発も、砥沢村の市川家と相談しながら進めたと思われる。

佐久における新田開発

それでは、なぜ五郎兵衛は佐久における新田開発に乗り出したのだろうか。その動機については諸説あるので紹介を省く。ただ一言述べておけば、水田のない谷間の村である羽沢村から国境を越えて信州へ下ると、広々とした「佐久平（佐久盆地）」が広がっている。しかも、そこかしこにまだ開発されていない「芝間」が残されている。五郎兵衛には、これを放っておくことはできなかったのではないかとと思われる。

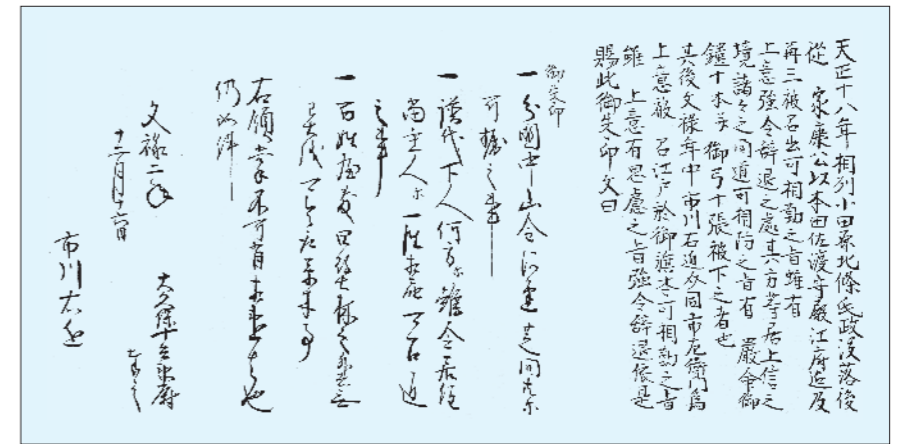


図1 徳川家康朱印状の写し（提供：市川三次）



写真2 南牧村の砥石山跡

佐久へ入った五郎兵衛は、市村新田・三河田新田を開発し、その後五郎兵衛新田の開発にとりかかったと考えられる。五郎兵衛が当時この地方一帯を支配していた小諸藩から、「矢嶋原の芝間」の開発を許可されたのは、寛永3（1626）年12月のことだった。それから約5年の歳月をかけて五郎兵衛用水路を開削し、五郎兵衛新田の開発により上原・中原・下原の3集落が成立した。後のデータになるが、天保5（1834）年の市村新田の石高が約549石、三河田新田が約195石、五郎兵衛新田が約875石だから、合わせて1,619石の新田を開発したことになる。五郎兵衛はこの3新田に「過分の金銀」を投じ、粉骨して開発した褒美の領地として、寛永19（1642）年に小諸藩から150石を与えられている。



写真3 五郎兵衛用水の水源

写真4 五郎兵衛用水路の旧掘貫

五郎兵衛用水路の規模や構造

3新田の開発のうち最も技術・労力・費用を要したのが五郎兵衛新田であった。水田を開くために必要な用水を引いてくるのが難しかったからである。五郎兵衛は用水を得るため、蓼科山の標高1,900m付近の湧き水を水源とし、その水を細小路川（下流は岩下川）へ落とし、湯沢川と合流して鹿曲川となるあたりで取水し、そこから用水路を開削して矢嶋原の芝間まで用水を引いてきたのだった。

しかし、間にはいくつも山があり、川もあった。そこへ用水を流すため、トンネル（掘貫）を掘ったり、川の上を渡すために木の樋（掛樋）をかけたりしなければならなかった。また、矢嶋原に到着した用水を広く行き渡らせるために、用水を矢嶋原の最も高いところに流す工夫もしている。それが盛土をして幹線水路を高くした「つきせぎ」あるいは「土樋」である。さらに、土で固めただけの「つきせぎ」の土手を補強するため、四角に切った芝草を「田楽ざし」にして張り付けるも行っている。

開削から40年ほど後の寛文11（1671）年の史料には、用水路の全長は約17.6kmと記されている。五郎兵衛

用水路は全長約20kmといわれるが、当初はそれより2kmほど短かったことになる。

その17.6kmの内訳は、山間部の用水路となる「岩間せぎ」の3.3kmと、比較的平坦部の用水路となる「土間

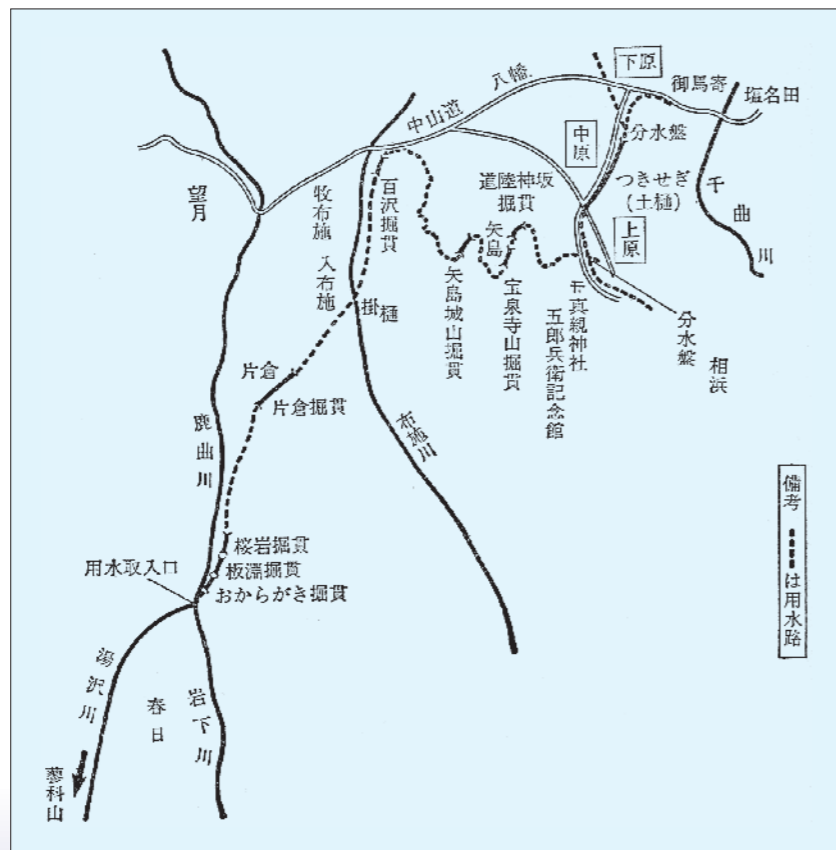


図2 五郎兵衛用水路概略図（『五郎兵衛新田と被差別部落』より）



写真5 五郎兵衛用水路のつきせぎ



写真6 秋の五郎兵衛田んぼ。遠くに見えるのは浅間山

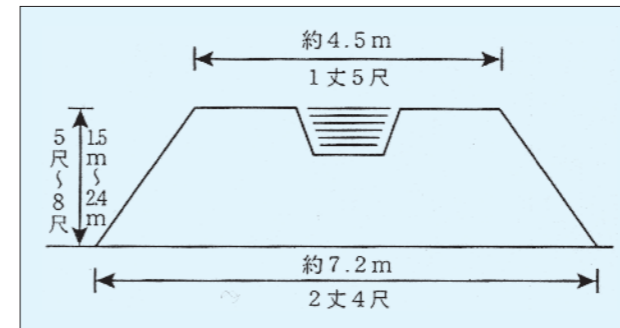


図3 つきせぎの断面図

せぎ」の14.3kmからなっていた。なおこの地方では、用水路を「せぎ」あるいは「せんげ」と呼んでいる。

岩間せぎは、4つの掘貫と「乗（法）掘せぎ」からなっていた。掘貫は矢嶋村山掘貫約216m、百沢掘貫約153m、片倉山掘貫約324m、桜岩掘貫約45mで、高さが約1.8m、幅が約1.5mとされている。この高さ寸法は、実際より一回り大きく記されているように思われる。なお掘貫は、江戸時代中期には9カ所に増えている。

「乗（法）掘せぎ」は、法すなわち斜面を掘った水路、言い換えればごく一般的な用水路と考えられる。「つきせぎ」は、地際すなわち底部の幅が約7.2m、高さが1.5～2.4m、長さが約1,080mとされているから、土量だけでも相当な量といえよう。

「金掘」「石切」が支えた

五郎兵衛が私財を投じてこの大工事をなしとげたわけだが、それを支える人々がいなければ完成することはなかったと思われる。とりわけ難工事であった掘貫は、高度な技術が必要だったが、それはどのような人々がもっていたのだろうか。残念ながら一人一人の名前は伝わっていないが、五郎兵衛の下で金山開発や砥石の採掘

に従事した「金掘」や「石切」と呼ばれた人々、あるいはそれに連なる人々ではなかったかと思われる。というのは、少し後の史料に「掘貫は金掘や石切でなければ掘ることができない」と記されているからである。

五郎兵衛新田より30年ほど後に、黒沢嘉兵衛が中心となって同じ佐久郡に開発された八重原新田開発の歴史を伝える史料にも同様のことが記されている。すなわち「岩間を切り、岩石を掘りぬくために、金掘や石切を雇い、その金道具を補修するために鍛冶を雇った」と。これらのことから、金掘や石切と呼ばれる専門技術者がいなければ、掘貫を掘ることはできなかったことがわかる。

なお、この史料には測量のことが「水盛」と記されている。それが具体的にどのような測量方法であったかはわからないが、これらの人々は精密な測量技術ももっていたと考えられる。というのは、五郎兵衛用水路は一部を除いて勾配が10mで2～3cm、つまり2/1000～3/1000にされているからである。また、300m余りの長い掘貫を、山の両側（穴口・穴尻）から掘り進めて無事開通させてもいる。

五郎兵衛用水路も八重原用水路も、こうした専門技術者の支えがあって開削された。その用水をもとに、今日おいしい五郎兵衛米や八重原米の産地として知られる、五郎兵衛新田や八重原新田が開発されたのだった。

<参考文献>

- 1) 浅科村史編集委員会編『浅科村史』浅科村、2005年3月
- 2) 南牧村郷土研究会編集発行『群馬県砥沢金山の解明 兜岩カエル化石の研究』2004年3月
- 3) 斎藤洋一「五郎兵衛新田と被差別部落」三一書房、1987年11月
- 4) 斎藤洋一「五郎兵衛用水の掘貫を掘ったのは誰か」『水と村の歴史』第6号、(財)信州農村開発史研究所、1990年12月
- 5) 斎藤洋一「八重原新田開発記録の再検討」『水と村の歴史』第30号、(一財)信州農村開発史研究所、2017年3月